

特集

DX × S&Tを活かした
ビジネスモデルへの挑戦

先進的グローバルヘルスケア
カンパニーとして、データと
デジタル技術を駆使して
ヘルスケア変革に貢献

第一三共グループは、創薬基盤とデジタル技術により一人ひとりの生涯に寄り添い、最適なヘルスケアソリューションを提供するトータルケアプラットフォームの実現により、患者さんに提供する価値のさらなる向上を目指します。

取締役 専務執行役員 DX推進ユニット長 CIO

大槻 昌彦



第一三共グループは右図に示すようなトータルケアプラットフォームにより、患者さんへの新しい価値を提供したいと考えていますが、これは、製薬企業だけで構築できるものではありません。一人ひとりの患者さん、医療機関、リアルワールドデータ*1を提供するデータプロバイダーや最新のデジタル技術を提供するIT企業など、多様なステークホルダーが連携・協業するエコシステムが必要です。

個人のバイタルサインや行動情報、健診情報、診療情報、リアルワールドデータといったデータを収集・提供し、社内外のシステムを組み合わせたDXプラットフォームで解析することを想定しています。この解析には、最新のデジタル技術や医療・健康に関する専門知識が欠かせません。

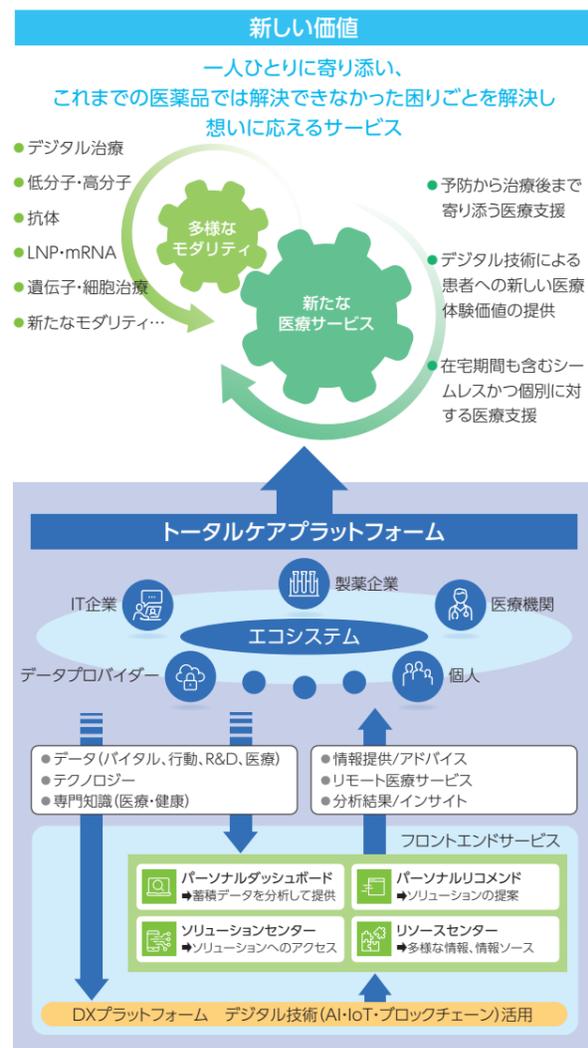
解析した結果は、個人にフィードバックすることになりますが、フロントエンドサービス*2を構築し、一人ひとりに対して可視化した健康情報の提供や治療法の提案、デジタル治療であればそれに対するアクセスや、それ以外の多様な情報へのアクセスを実現したいと考えています。

このような取り組みを通じて、一人ひとりに寄り添い、これまでの医薬品では解決できなかった困りごとを解決し、想いに応えるサービスの展開を作り上げ、新たな価値を提供していきたいと考えています。

今後、治療手段(モダリティ)としてデジタル治療を新たに加えることはもちろんのこと、予防や治療後の医療支援等を含む新しい医療サービスの創造も視野に入れて取り組んでまいります。

*1 実医療における臨床情報 *2 顧客が直接アクセスして利用するサービス

▶ DXを通じて当社が創造する新しい価値



がん患者さんに対するトータルケアを探求

当社は現在、「がんに強みを持つ先進的グローバル創業企業」になることを目標に事業を展開しています。そのため先述したトータルケアプラットフォームの最初の取り組みとしては、「がん患者さんに対するトータルケア」を主軸に検討を進めています。がん治療においては、革新的ながん治療薬も然ることながら、実医療において、がんの病態に伴う周辺症状やがん治療薬に伴う副作用を十分管理しながら、がん治療薬を適正な量と期間、継続して使用できるようにすることが大切です。

世界的に早期の支持・緩和ケアや副作用管理が注目されている中、当社はがん治療の最適化に向けた取り組みの一つとして、医薬品等のポテンシャル(潜在的能力)を最大限引き出せるようデジタル技術を最大限に活用することを指向し、公的保険

適用の医療機器アプリ開発の経験をもつ株式会社CureAppと「がん治療における副作用やがん周辺症状をマネジメントするアプリ」の共同開発を開始しました。

このアプリで、がんの病態に伴う周辺症状やがん治療薬に伴う副作用を管理することにより、早期の治療介入や予防につなげ、その結果として治療効果の向上、患者さんのQOL (Quality of Life: 生活の質)の維持・改善、および予後の改善を期待しています。

今後も、がん患者さん一人ひとりに寄り添いながら、デジタル技術を含むさまざまな最適な医療手段(モダリティ・ソリューション)を提供できるトータルケアを探求していきます。

▶ がん治療の最適化への取り組み



* Real World Dataの略。リアルワールドデータ

中計の戦略の柱を支えるDXの取り組み

創業に関する研究、臨床開発、製造、コーポレートといったさまざまな部所から得られるデータを一元化し分析し、また外部のデータも含めて解析することにより、データ駆動型の経営を実践していきます。

また、新たなデジタル技術活用によりバリューチェーンの業務プロセスの変革、業務の効率化を行い、そこで生まれた時間をヒトが担うべき業務により多く使えるように変革を進めていきます。

当社は、これらのデジタルを活用した変革、デジタルトランスフォーメーションを進めるために、IT、組織、人材といった基盤を整備拡充していきます。

